

歌のはじめに

思えば昭和十八年、十八歳にて上京、東京田無の学生寮に入り、私のまこと短い青春は始まつたと言つてよい。それより二年を経ずして学生出陣があつたのである。食糧事情は次第に悪くなつていたが、まだ郊外には余裕があり、空腹を感じなかつた。帰つて来れば寮のお婆さんが薩摩芋を蒸かして呉れていた。川越いものホクホクした旨さが忘れられない。田園があり、雑木林があり、「武藏野」があつたのである。田無街道を高吟乱舞したことも懐かしい。

この青春を回想するとき、私を遣つて呉れた亡き父母に感謝せざにはいられない。私の短歌はこの様な時期にこの様な境遇において自ずと生まれて來たものごとくである。この頃の講義の中の「明治大正文学史」の短歌に魅せられたことも付記したい。この頃の幾首かは幼い感傷ではあるが、兎も角も、歌に取つ付いていつたのである。翌十九年の十二月には、朝鮮の北、会寧に入営し

た。

身体検査の結果、即日帰郷であつた。これは全く予想されぬことで、九死に一生を得たのである。この時、検査官から「大丈夫か」と聞かれ即座に「大丈夫です」と答えたが、その人は私をじつと見ていて筆を探るや、紙に「即日帰郷」と朱書きしたのである。「何故に」と云う疑問は解けないし、運命的なものさへ感じている。今は僅かに襟章の星が存かぶのである。この部隊は戦後シベリヤに留めとなつたから、私の体では殆ど生還は覚束ないであろう。

それから、翌二十年の六月、再び召集があるので家にいたこととなる。

何首かの歌が残つたが、これは私の短い青春の終りであつたらう。

歌にはこちらの緊張と、何か耐え難い思いとが交錯して、一種のリズムを作つてゐるか知れない。二十年八月、釜山にて終戦、復員、引揚げと続く。岩沼の下野郷に十月引揚げたが、二十二年頃までの間、引揚者は身の物を切り売りしてでも米に替えたのであつた。雑草も食べたのであつた。漸く食糧事情が好転しきけた二十三年から二十四年に掛けての歌が若干残つたのである。この頃

出始めた短歌季刊誌なども買つたが殆ど撲滅する程度でしかなかつた。いつも自分の歌だけに頼つていたのである。ただこの時期、歌に一生懸命であつたことだけは間違いない。

二十五年、その壇勤めた公団が廃止され、身の置き所を当時発足した警察予備隊に求めたのであつた。私は集団の規律ある生活を欲していたから、入隊したのである。

入隊以来、略十年の空白があつた如くである。三十年結婚したが、両親の面倒もみたのである。長女、長男が生まれ、三十七、八年頃、若干の歌があるのである。

たまたま、病気入院中に訪ふ子に、絵を画かせた歌など忘れられない。

五十年、五十歳で定年退職、職を変え、「会社」と云うものの苦労を味わつた。五十五歳で突然、左眼の球内障を患い、結局左眼は失明の状態となつた。

六十一歳にて、四度目の会社を去ることとなつた。近在の丘谷を開拓して造った土地を買って置いたのが後に立つて來た。辺りは雑木林の自然で気が置け

ない。土質は鹿沼土に似て、さらさらしているので、馬鈴薯、大根はこの二年、よく取れた。それで歌に畠もの連作も出来たりした。

私は人との交わりに強い欲望を持つものであるが、一、二の例を除いて満足のゆくものではなかった。到底、歌壇にも出ず、歌を発表することもなかつた。良くも悪くも自己の聲に閉じ籠つたこととなる。

私は根っから短歌が好きであつたから、いつも頭の片隅から離れなかつたのである。仮え、作れない時期があつたとしても、それであるから、一時期、私は斎藤茂吉の「萬葉秀歌」を愛讀し、歌、三百を手帖に写し常に持ち歩いたものである。私の歌の師は万葉集であり、茂吉であつた。茂吉全集三十六巻は、年月をかけ最近漸く読み終り大前で人柄を觸んだ程度である。それで短歌の方、深く読まねばならず、万葉集また然りである。

この様な折、妻は編集のこと言ひ言ひしたこともあり、自分の字が読みにくいうこともあつたから、この辺で活字にしようと思いつた。

運々とした歩みではあるが、後年の折々の感慨を述ぶる連作の中に、幾許か

の歌を探ることが出来ようか。

言わせて頂けるなら、「いろいろな夾雜物を捨て、一点の單純所に參入しつつ、こころのリズムを歌い上げるのが短歌である」とする私の歌の本道を歩かねばならないと思うのである。

梅干のむらさき紫蘇の葉を浸す熱き湯飲みて歌編み初めむ

昭和六十三年二月十九日 奇しくも父の二十九回忌の命日に筆を執りて。

名取が丘の寓居にて 伊藤 英郎

日 次

昭和十八年	東京田無時代	27
昭和十九年、二十年	朝鮮京城時代	30
昭和二十三年、二十四年	岩沼、下野郷時代	34
昭和二十四年	仙台、原町苦竹時代	34
昭和三十五年	船岡、並松の家にて父逝く	55
昭和四十年	仙台、苦竹時代	54
仙台、原町苦竹時代	独り居	54
昭和三十五年	船岡、並松の家にて父逝く	55
昭和四十年	仙台、苦竹時代	54
隊にて	54	
指人形	54	
入院	56	
わが庭	56	
きさらぎ	57	
新居にて	57	
東仙台スペルマン病院にて母死す	59	
昭和四十三年	63	
新居にて	63	
わが庭	65	
きさらぎ	66	
九月	66	
霜月	67	
大晦日	67	
昭和四十五年	68	
十一月上旬を過ぐ	69	
姫姫の生	70	
霜月も中旬を過ぐ	68	

十二月折々のうた

昭和四十六年

古墳の坂

春日

末娘

小手毬の花

新若葉

折に触れて

昭和四十七年

小吟

いなご取り

昭和四十八年

杉の大木

暑き日

お月見

折々のうた

クリスマスの櫻

昭和四十九年

伊豆沼の白鳥

折に触れて

鳥の海、の海水浴

昭和五十三年

長男、海上自衛隊入隊

子雀

昭和五十五年

丘の桜

ブリキの如雨露

丘下の鯉のぼり

花冷ゆる道

若かへるで

丘の老夫婦

アカシア並木

98 97 97 95 94 94 93

92

91

90

89

88

87

昭和五十六年

病室にて

眼病前後

冬の日

日高赤石

高橋脩児のこと

眼を病みてより折々のうた

雷神山古墳

初霜の土

たぬききつねの遊園地

朝の散歩

樽水ダム

霜月はゆかむ

雷神山古墳

朝日の走り

118

118

117

116

114

113

109

109

101

100

この丘の墓地

風花

えんどうの若葉

ひと巻枯れ葉

奥の青空

病室にて

真夏日

白雲

日触

折に触れて

わかさぎ釣り

飛行機のうた

月のひかり

雪の上のえんどう

入院よりの歌

137

135

133

132

130

129

128

127

126

125

123

122

120

眼痛けれど	140
陶作品展を観終えて	142
春となりるつ	143
春雷	145
丘畠のえんどう	146
折に触れて	146
再びえんどうのうた	148
若楓	148
おん祠の桜	149
桜散る	150
霧の歌	151
五月はゆかむ	152
雨ふりつづく	153
上京、その前後	154
梅雨空の下	156
おん祠の七月	157
梅雨土の上	158
小感	159
ふたたび梅雨の頃を	160
梅雨道のかたつむり	161
梅雨の蝶	162
丘斜面	163
丘辺ひまわり	165
栗の木の越	166
夕暮るる庭	167
八月中旬を過ぐ	168
小吟	169
はぜ釣りの歌	170
おん祠の桜落ち葉	171
さざんか垣根	172
冬に向かふ	173
時雨の雨	174

昭和六十年

いまは亡き坂本行雄君の靈前に捧ぐ

偶感

五月二十三日は母が命日なれば

幼きもの等

秋の雨ふる

おん祠、秋風ぞ吹く

茂吉記念館を妻と尋ねて

紺の訓練帽

十二月初旬となる

われ職を辞めむとして

昭和六十一年

末娘勤め始めければ

きさらぎころ

雷神山古墳

雛飾る子よ

251

252

折々のうた 52
上京の日に 52
梅雨の間の風 25
栗の花穂 26
コスマスの苗 27
晴蛉のうた 28
蟬落つ 29
萩の花咲く 29
薄のうた 29
「菅生」オートバイレース場にて 29
丘畑にて 29
隠元豆 29
丘の祠 29

昭和六十二年

丘の祠

その二

丘原

丘の祠

268

267

266

265

264

263

262

261

260

259

258

257

256

255

254

253

252

251

250

249

248

247

246

245

244

243

242

241

240

239

238

237

236

235

234

233

232

231

230

鶴どりの歌

折々のうた

昭和五十九年

折々のうた

アロエの花

二の倉浜ゆき

折々の歌

白菜漬

きさらぎとなる

底の雪

きさらぎの丘

霞棚引く

栗の穂生る

庭柿

眼病手術のうた（五十七年三月補遺）

昭和五十九年

無題

種蒔き（一）

種蒔き（二）

街路樹

折々の歌

三陸海岸と遠野と

盆に入りてより後

淳夫と夏休み十日間を過しければ

秋立ちぬ

車窓にて

基地にて

長男淳夫、最後の休暇となりて

師走に入らむ

五十九年補足

228 226 225 222 221 219 218 217 215 214 213 212 211 208

206 205 203 201 199 198 193 192 191 188 186 182 180

丘の祠 その三	270
東芝クレジットを退職す	271
折々のうた	272
動物園にて	273
水仙の花	274
雨の降らねば	275
白雲	276
折々のうた	277
おん祠祭り日となりて	278
茂吉記念館	279
金瓶の金谷堂	280
若菜と虹と	281
楮榔の実の飾り玉	282
豌豆の実	283
中澤屋敷を尋ねて	284
水無月のおん祠	285
へら鮒釣りに樽水ダムゆき	286
ふたたびへら鮒釣りにゆくも	287
畑の南瓜	288
庭の向日葵	289
公園の木槿	290
鈴虫の子を飼ふ	291
記念切手「金龜舍利塔」	292
新しき唐鍊	293
落ち蝶と桔梗と	294
鈴虫生きぬ	295
百日紅の花	296
胡瓜の花	297
かきなの種	298
丘畠と丘谿と	299
鈴虫鳴けり	300
畑仕事	301
	302
	303
	304
	305
	306
	307
	308
	309
	310
	311

折に触れて	312
丘畠に憩ふ	314
二口峡谷	315
裸木となる木樺	319
丘の上の祠路	320
愛車（サニー一二〇〇）を廃車せんとして	321

昭和六十三年

折りに触れて	312
--------	-----

日輪	324
----	-----

折りに触れて	325
--------	-----

平成元年

八月三日頃	327
-------	-----

入院、十日を臥して	329
-----------	-----

葦の種	330
-----	-----

病室にて	331
------	-----

蜘蛛たち、ほか	333
---------	-----

蜘蛛たち、ほか	333
---------	-----

北窓の邊

木枯らしの音	334
--------	-----

唐辛子の実	335
-------	-----

ひとの死にせし	336
---------	-----

裏紙の歌	337
------	-----

病室にて	338
------	-----

白雲の行き	339
-------	-----

低山竜のいろ	340
--------	-----

新幹線上り列車ゆく	341
-----------	-----

折りに触れて	342
--------	-----

外出許可ありて	343
---------	-----

プラタナス木立	344
---------	-----

病室にて	345
------	-----

霜月はゆかむ	346
--------	-----

病室、その周辺	347
---------	-----

小さなる姫	348
-------	-----

この日頃	358
退院し帰りては、キウヰの歌	361
歌集のことなど	363
わが畑にゆきて	365
平成二年	
きさらぎの雨	366
五月中旬となる	367
結婚衣装のデモストレーションを見て	368
平成三年	
風船かつら、ほか	369
平成四年	
庭の樹々たち	370
わが孫生まれ満ひと月となりて	371
紀ノ川と高野山と	372
平成五年	
岸和田城下にて	373
平成六年	
琴平、岡山、倉敷にて	374
和田博行君の靈前に捧ぐ	376
小さな旅	377
パリからの通信	378
楓落ち葉	379
師走となりて	380
平成七年	
藪柑子	381
菊苗植えぬ	382
アルペンルート、立山連峰と上高地行	383
平成八年	
祠高松	384
平成十年	
花のいのち	385
七十三歳の誕生日に	386

わが家外壁	395
駐輪場の勤め辞めむとして	393
折に触れて	394
今野直人君	394
鳥の海ゆき	395
坂元の祖母九十歳となり給ひて	396
折に触れて	397
平成十一年	398
佗助	399
折々のうた	400
梶川先生	401
涌沢先生	402
「死に方の流儀」なるもの	403
七福神の面	404
薬師堂古墳	405
わが孫たち	406
朝顔	407
吾妻の富士登山ゆきを果たしければ	408
厨辺の南瓜	409
朝顔 その二	410
大根の種	411
日光の旅	412
富弘美術館の絵葉書	413
初秋の空	414
湯殿山参拜	415
ひと叢すすき	416
佗助の花落つ	417

庭のさざんか.....

天平ロマン館見学、黄金山神社参拝.....

古川の大祖母.....

初霜ならむ.....

折りに触れて.....

平成十二年

絵手紙.....

きんさんの映像を拝見す.....

興ありて.....

この丘に.....

孫たち来りては帰る.....

中国八日間の旅.....

豌豆の竹挿す.....

丘のさくら散る.....

47

46

45

44

43

42

41

40

39

38

37

36

昭和十八年

東京田無時代

疲れたる眼(まなこ)に沁みる青空を仰げは樂しわが思ひかな

しつとりと白雪降りし夜明け前しづけき顔に小雨ちらつく

照りゐたる光りもいつか白けゆき昼飯を食ふ手許震へぬ

舞風に枯れ葉三つ四つ戯れてひらひら回る秋深かりし

黒き雲ちぎれちぎれに月を過ぎ淡きひかりは照りては曇る

薄墨に秩父の山は遠々に横たはる見ゆ武藏野の原

何處より散りて来るかもみじ葉の蜘蛛の巣に懸かる秋の日の暮れ

野良に出づる農夫のくるまひとすぢの畦道長く轍残れり

ふるさとへ友は帰れり枯れ果つる唐黍のもとひとり動かず

夕日落ちあと静かなる夕空のいろどりゆくをひとり野に立ち

待ち待ちしわがたらちねの文袖ふみにいま立ちてみる富士の山はも

枯れ草や子供の声を後にして堤を歩むわがこころかな

すらすらと月の前過ぐ黒き雲いつか無くなり円き月照る

にはとりは夜明けを告げぬ三日月の許にかがやく星ひとつあり

ごうごうと魂までも攬うごと木枯らし聞けば椎の実は落つ

黒き樹を揺るがして吹く木枯らしは椎の実落し過ぎてゆきたり

晴るる日のおほかたなくてこの秋の過ぎゆかむときわれに歌なし

幾程も歩まずてふと家を恋ふ遙かに遠く離れ来しかな

消防の喰りも凄く走りゆき押し迫る年われ旅に出づ

近くなりまた遠くなり消え去りし駒のひづめの打つ夜寒かな

昭和十九年、二十年

朝鮮京城時代

過ぎ交ひし牛のまなこのわれに燃ゆ燃へたるもの限り知らずも

何物が戸を動かすや物思ふ秋暮れなむとしてひそかにぞ泣く

白き手と赤き手袋絡み合ひほぐれつ解けつ晚秋秋空は青き

ゆうらりと投げし煙草の斜めなる石にあたりて動かざりけり

から傘の竹を握りてゆく道にさやけく震ふ雨の音かな

眠られぬ悩みに星の冴えをみて息しろじろと静寂に溶けゆくを

老木の死を超えて立つ秋の日や毬投げ遊ぶ子等を見つつも
陽を受けて小筆の穂先ひびきある影を映しつ紙に冴ゆるも

鎮まれる白きみ空に鳶の輪を描きて何処去りゆきし後

土に泣かむ少女の土を撫でつただひとり親しむさまを見つつも

わが歩む前にひと葉のやや大き落ち葉し吹かれ止まりあへず

抱かれたる三つ四つの女の子わが頬に触れなんとせし手の可愛ゆかり

灰燼に凍えて立つやときをりにあはれ何をか灰の零るる

灰燼に凍えて立つや何處より銅鑼にも似たる鐘の音すなり

後悔よ遅し叩きつけたる煙草の火火の粉と散りて消えらく悲しも

焦げにつつ束の間燃ゆる火の玉のなお妖しかる息吹きを見よ

しきじろと流るる水のやや狭み薄き氷を子等の踏む見ゆ

城壁は白く老い立ち雪しぶく風に円かに子の駆ける見ゆ

発掘の古壺の匂ひ凍りたる林檎の赤く錆びにけるかも

あこがれは安らかにありひとすぢのうすくれなるの刹那のひかり

雨の音冷ゆる静けさ虫もいま鳴き絶ゆ秋よすべて濡れつつ

春一日埃に醉ふて破れ車搖れゆく響きひびき悲しも

春ははや小高き岡に上りつつ空に芽を吹く子の声に來し

貧しき巷外燈ひとつ灯してありなにゆゑとなくこころ輝く

太陽を見るも瞳の痛からぬ曇り日なりし歌ふてゆきし子

昭和二十三年、二十四年

岩沼、下野郷時代

祈らるる光なりけり駅長の手に提燈の流れ動かず

朝まだき打ち水すがしなかにゐて子犬はそつと口笛に来る

忘れ來し鉛筆を思ふ停車場に書きたきことのこころに積る

わが歩み速かる朝をつねにつねにいのち光りてあらむこと希ねがふ

燕は翻り一直線に稻の青き波のうへを流れゆけり

太陽はうしろにありて低く光り道を来向かふ人の顔見えず

こころ和む日秋空高く昇りゆく蜻蛉とんぼの小さき点をみつめぬ

雨は去り今朝秋ぞ立つ道ゆけば山の輪郭も眼には沁しづむなれ

歌書きて読み終る間まのインクの色の青き若さを親しみにけり

この朝を溢るるほどに満たされてインクはあれば密かにペン付けぬ

あざみ咲き蝶は止まれる淡々と幼き思ひ出にいまは寄らむか

細竹にとんぼ潜まる昼過ぎのこの鎮ままりに雨は降り出づ

夜の雨にトマト木倒れるたりけり青き実つけし赤き実つけし

陽に光り朝露光り葉の揺らぐ草あり汽車の窓よりは見つ

空も仰がずてこのひたごころ守らむとするいまのわれなる

此処よりして渦巻き形に夜の世界プラットホームの灯は点されぬ

ほのかなる灯り見上げてこの夜の始まらむ雰囲気の中に歩を入れしむ

何も無けれど本当の胡瓜の味を味はふ日曜の昼の食欲なり

過ぎ交ふる男の瞳なにゆゑかよき未来あり我を省みる

レインコートに拙き映画の符の残り罪のごとくもちりぢりに裂く

話しかけたる男とわれと左右に離れ一本の道を物言はず行く

新しき望み生れくる心地して発車間際の汽車に煙草とり出づ

霧のごとき雨の白さよ眼反らせば音の絶えたるあまりに淋し

埃舞ふ街路にまなこほそぼそと開きてわれの歩むなりけり

夕陽映えひとびとの足の赤くして此処より出水渡らんとする

汽車を待つ時の長さも思ひみぬひそかに時を惜しむごころ湧く

ときに歌胸に還りて耐へ難し歌捨てし日の幾月を経ぬ

日の暮れてわが帰り来ればいつもいつも貧しき釣り人に会ふが常なる

青白き女の顔がりんご摘み目方掛けゐる夜の道をゆく

頭蓋骨が跡を付け来る恐怖あり外灯に佇みいよよ暗き道見ぬ

日の暮るる野辺より山羊を連れ返りひと何か言ふ家に入らざれば

汽車のドアきりきり閉じて背にしたる冷たきガラスの感触を愛しむ

指先にどんよりとした重さ来て耐えてあるときわれの見えくる

風に乗り遠く稻上ぐるひとびとの声する朝を秋蘇る

前にあり絶えずゆるやかにひびきゆく牛車に付きてこころ和み來

町に出づるひとすぢの道あかあかとわが妄想はここに捨つべく

新しきマフラー著けし朝にしてわれをとりまくさきはひを思ふ

蟬を捕る竿は光りて夕映えの杉の林に人も見えなく

手に握る雑誌は白く新しく夜の女を冷ややかに見る

赤ぐろき南天の実は残りみて冬枯れの道をわれ帰りくる

わが歌のなべて拙くみゆる日はものも思はず外の面と^もに向かふ

点々と雪の田の面に鳥らの黒きが見えて何か啄む

吹雪の中を来れる貨車も連結され黒みをもちし雪は積もれる

弟は十日を臥して煩痩せし瘦せたりとのみ繰り返し言ふ

朝露は銀に光りてありたれどわが弟の病やまい癒えざる

懺悔するこころとなりて夜の街を戻ればからだ冷え切りてゐる

日曜の午後の三時となりしきつと立ちて茂吉の歌集取り出づ

ときとして歌語る友欲しと思ふ歌会のことなど密かに羨む

竹藪に陽の滴りて脂ぎり風吹き騒ぐみれどあかぬかも

吹き尽くし風はたと止むたまゆらをひとつ竹の面白く光る

陽のしずく風定まれば笹の葉のうへに凝りて竹立ち尽くす

陽のひかりいまは消え果て竹藪のうしろに大き雲興りゐる

汽車にありて可愛ゆくなれるこころなればソフトの雪も思ひみるなり

西の空のひととこ潤み雪止みてかの村落の静かなるいろ

病癒えたれどいまだよろめく足踏みて切れ透る嶺刈田岳仰ぐ

いつもいつもわれに付きゆく歌なりき今宵は沁みてこの手帖恋ふるも

荒れてゐる村道繕ふ碎石のくだけを置きて三月余り過ぐ

今は既にコバルト色の碎石も土に埋もれし高み越えゆく

掘割りに今朝張り初めし薄氷かく滑らなる面も思はむ

暮れ残る白き道ゆくトラックの砂ぼこり起てばわが眼寄りゆく

白き壁の浮き出づるときほの^{あか}褚^{じだ}み耳^た朶^{じだ}に触れたる冬日^{たゆび}なりける

耳朶に触るるほのぬくもりに冬の日のひとつの大陽を思ひつつゆく

歩みつつよろめきは来て歌に^{すが}継^つるひとつの節の「赤い灯^ひがあ^{とも}灯りや」

われ歌を作りゐるときちちのみの父はも寂し息^{いき}衝^づき給^{たま}ふ

さ搖るぎもみせず夜^よに入る庭のさま驚きにつつ暫くは見し

ばたん雪は燃えに燃えたる生活へのあこがれに似て降りも出づなれ

限りある命を思ふばたん雪の舞ひて去りたる空明みかも

今宵遠く汽車の汽笛と響きさへ胸に痛める青年となる

板張りの汽車の窓洩るる朝日子に唇は赤く射されけるかも

四年経て相会ひ別れ汽車に乗り握り合はざる手をかなしみぬ

われの名と表書き親しみ落としたるポストの底にひびく音深く

この夜のポストの辺り静けきはわれの落とせる封書のゆゑならむ

巡らせる煩惱崩れ夕日赤くゆくべき汽車の発ちゆくを見よ

森の上に浮かび出でたる黄なる月靴づれの足立ち止まり見る

汗流れ白き埃の風に吹かれひと日の終りの顔を見守る

物言はず手真似に話す少女等の瞳は潤み光りけるかも

物言はぬ少女の一人尽くさざることもありけん母音を発す

物言はぬ少女の為せるその業を見まじきものに背にしたるかな

百貨店に土曜の午後を這入りゆき値高き品を見つつ帰れり

個のいのち現れ出でて輝けと希ひつつはや今宵眠らむ

わがいのちときめき今宵明日を待つきはひどもの寄りて待つごと

海松のパイプを欲しく思ひたるかの暑く渴く日を笑みて憶ふも

春雨の降り止む夕べ空と地の曇りの中の身を包む香よ

牛が居る黙つて春の奥の野に耕す土に黒い牛が居る

かの啞の少女を今宵思ひけり二度会ひしことも思ひ出づるなり

耕耘機の横たはるあり過ぎてより研ぎ澄まされしひかりのくるも
この町に新派芝居のビラ貼られ女童めわらわ見入るをんな横たはる図なり

いのち恋しき暗中模索の日も続き今朝すがしくて鳥の声聞く

働きて三十二万の税金の掛かりしと云ふ人に今朝は会ひにけり

真後ろに黄金光おうごんこうの夕日あり大空はありて林に入りぬ

雨降らむ曇りの空の漂ひにひつそりと赤き浮子うき降り立ちにけり

「早太り花不知時無大根」われは読み父は呟く「この種も蒔かねばならぬ」

結局はこの創刊の機関紙にわが歌は載せず措かむとはせし

われを励まし編集成りて発刊すパンフレットにて唇を噛む

流れ去り忘れ去るとも思へかも過程とはしてこれも愛さむ

天白く純きひかりの洩るるころ幹のみの樹の寂しかる見ゆ

銀色の小さき魚躍り老人の物言ひし日も過ぎゆきにけり

ゆくりなくマツチの軸の燃えあがる黒ばむ竹の灰落しの中

われに用なきマツチの軸の火なりけむ千切れ千切れに短くなりつも

絶えずゆつくりとうたびとあゆみゆくごとし無為の日多くわれ遅れるつ

短なる林を過ぎむ高き木の若葉のいろと蒼空あおぞらに会ふ

脚長き蚊の昇りゆきややありて水色の空を知り初めにけり

いつまでも変はることあらず遂に終ることに対するひそかなる反感よ

日曜の昼を疲れて寝ねたれば夕暮れてより歌読みつづく

あらそへぬちからをわれに恵ませてゆかしめ給ふ尊くもあるか

田の畦の草のひとむら露白く置かるるゆゑに冷えて身に沁む

山並みの空真青なるあらはれて五月の朝の地に滲み透る

浅黄あさぎに若き四月の雜草の根に持つ土の一塊ひとくれを見る

地に満てる五月の朝の露白く遠山竝とほやまなみのそら真青なる

われに問ひわれに答へてつづまりは麦の落ち穂を拾はむとせり

鬱々と地の果てさへも白むとき後ろに低きいかづちの音

いかづちの底低きおと一度聞きて山並みの貌われに近づく

いかづちの低く鳴りたるままにして二度とは鳴らず険しき山のいろ

いかづちは暗く閉ざせる山並みの遙かなるところ鳴りも出づなれ
いかづちは暗く閉ざせる山並みの遙かなるところ鳴りも出づなれ

暮るる日を一筋に鳴く蟬のありまことじんじんと身は起き直る

思へども高き書籍の購へず耐える限度に疑ひを持つ

書を読まず秋をゆかしめ幾許の収穫ありや疑ひてみる

書を読まず秋をゆかしむ疑ひの底に幼く信するものよ

新しき秋のはじめのひかり帯び林を出でて人等來向かふ

あかあかと土に滲みると思ひつつ秋のはじめの日をふりかへる

秋の来るひかり地に滲み冷たくてあかあかとしてこの道をゆく

ひんがしの森の彼方にさんさんと届かぬ秋の陽の幼しよ

自然はやわれを救ふかさびしみて秋の木の葉の揺れも告げなむ

淡々と近づきゆけば救はれて秋の木の葉の揺れも告げなむ

ひとびとはひかりとなりて林より来向かふがみゆ太初の日のごと

短距離の此処始発なる列車にはひろびろと座り綺麗な想念

雨に昏るる小さき町の往来に明^{あか}き灯みせて章魚^{たこ}の足切る

夕べの風やや荒れて吹く舗道ゆき何か新しき季節を感ず

この汽車の車内に触るものみなに雑感情あり日をまた閉ずる

捨てるに忍びず補遺とした 昭和二十三年分

小雨ふる路傍の花よ汝^{なれ}ひとつ淡きさだめのむらさきのいろ

朝まだき遠く橋の上をゆく人も憎からぬこころにしばし見守る

かなしきは求めんとするこころなれ今日もひそかに書店にぞ入る

行き難き道こそかなしあざみ咲く遠き思ひ出にいまは寄らむか

柔らかに土は栗色に濡れしみじみと晩夏去りゆくこころを思ふ

日焼けして瞳もひかる君にして会はざりし半年の生活を思ふ

仙台、原町苦竹時代

独り居

暑き日を原稿用紙に向ひたり独り居のわれこころ緊りてしまりて

妻子らは里に帰りてゐたりけり暑夜なれどもの書きゐたり

平安はひそかなものと思ひおり隣家のラジオとくに高くして

ところどころ漢字忘れてゐたりけり辞典を欲しと思ひて眠る

こころ貧しわれと思へど今宵起きて書きもの添削すこの小さなる幸せ

昭和三十五年

船岡、並松の家にて父逝く 二月十九日

父は、三十五年正月、虫が知らせたかのようにひよつこり、仙台原町のアパートに尋ねて来た。そして好きな酒を飲み喜んで帰つて行つた。それから、ひと月余の後、脳溢血で亡くなるのである。当時、離れて生活し暮らしも容易ならず為に面倒を見ることも何んなかつたのである。父は身体強健で八十までは生きると言つていた。あまりにも早い死であった。船岡で長女を背負つていた頃の姿が瞼にあるのである。

昏睡の中より醒めてわが名呼ぶ父が枕辺に水含ますも

ひと言のわが名呼び給ふちのみの父のやさしさ噛みしめてゐき

昭和四十年

仙台、苦竹時代

隊にて 一月十四日

息白く列より興りゆたりけり国旗掲ぐと並びてあれば
整列し国旗掲ぐるを待てある我等隊員の吐く息白し
この朝の冬日は親し塗り替ふる白き隊舎の壁を照らして

指人形 一月十七日

目覚めたる朝の寝台に吾子はやも指人形を踊らせにけり
落ちてある指人形を拾ひては吾子の眠れる床の辺に置く

入院 十月中旬

朝明けの窓にも倚りな手術終へしわれのからだに街はさやけし

吾妹子が山路に摘める竜胆の花は愛しく思はるるかも

押し花をひらき見したり吾妹子が山路に摘めるりんどうの花

万葉の歌写したる手帖にて訪ふ吾子に絵を画かしめつ

瞳上げときおり吾を見書き継ぎし児らが写生の父の顔ぞこれ

ひと日寝ね十二三首みかそらんを詠ずる万葉の歌三百となる

三百の万葉集の歌写す手帖を握り日暮らすらんか

宮城野にて

昭和四十一年四月十日

校庭の柔土踏やはづらみてゆくわれに一面にあるスパイクの跡

昭和四十三年

東仙台 スペルマン病院にて母死す 五月二十三日

母の趣味と言えばおかしいが、生れ育つた朝鮮の地、京城の思い出に浸ることしかなかつた。また、嗜好は食べ物で大食家であつた。甘いものが好きで、洋菓子には目が無かつた。それに、入浴が好きで風呂を炊く日は肌嫌がよかつた。さらに、病的なほど潔癖性であつた。父の死後、一緒に間借り生活の苦労をした。幾度かの引っ越しがあり最後に始めて間借りから官舎に住んだ。官舎と言つても二軒長屋である。

四十二年暮れ、脚の浮腫み酷く病院に連れて行つた。この時、医者から何でこんなになるまでほつておいたかと叱責された。母は大の病院嫌いであつたがそのことは言わなかつた。その年の十月には名取に家を建てたが空き屋としていた。母の入院もあつたからである。入院後、胃癌の末期であり、桜の咲く頃まで保つかどうかと告げられた四十三年三月、名取に移住したが、名取へ東仙台間をスキ50ccのバイクで往復したのである。

気丈な母はひと晩も病苦を言わなかつた。そして、死期の近づく頃、「何もよくすることはない。神様が助けて下さった。波瀾の一生だつた」と言い残し亡くなつた。私は必死になつて母の言葉を手帖に書き記したのである。母が桜散り、なお一カ

月余を生きたのは心臓が強かつたからであると告げられた。新居に用意した母の部屋には遂に入ることがなかつた。なきがらだけが帰つて來たのである。

付き添ひて三日を過ぐれば交替す看護婦の顔もみな覚えけり

二月二十七日

付き添ひて三日を過ぎぬこの朝の回診のあと母の顔よし

ひと本の花も造花が良しと言ふ造花なれば枯れずと母言ふ

今日ひと日雪ふりしきりまた止みぬ此を繰り返し終りし夕べ 三月十三日

芥子漬け金山寺味噌そのほかの食べ物のこと宣らせ給ひき

食べ物のこといろいろと指図して楽しげなる母の枕辺*くらべを去る

氣丈の母なり「精神一到何事か成らざらん」を幾度か口にせり

三月二十七日

胡瓜漬け千切りて口に入れてあり母のいのちの強さみつむる

己が腕の太さ計りてその瘦せし腕の細さは言ひ給はぬに

まぶたの下に涙のしづく宿りたり淋しさを口には出さぬ母なり

涙の零拭ひやり母の顔みつむ冷たきまでの母の顔みつむ

食べ物をうけつけずなりぬこの夜半の母の額よ長き黒髪よ

食べ物をうけつけずなりしこの夜半の母の額に頬あてて泣く 四月二日

既にして食べなくなりし母にして「からし漬け買おうかな」と言ひ給ふ

枕辺にパイナップルの輪切り二つ置きて食べずとも満足の母をかなしむ

パイナップル冷たく喉を通りたり母の食べ得ぬものを食ひおり

病院の坂を下れば桜散り言葉やさしき母と別るる

冷たき雨ひと日降り続き夜となり母の早くも眠り給ふも

ははそはの母の臨終に言ひ給ふ「朝鮮りんごの小さいの買つて来い
あれ旨いで」

からだ冷え、体温計三十五度より上がらず、目あけてご覧と言つて
ようやく目ひらきてわれをみる。五月二十二日 よる八時

小鳥達さえずること聞こゆ母逝きてかがやける五月となりゆくものか

新居にて

実石榴の新芽の赤く揃ひ立つことをよろこび水遣りにけり 五月八日

帰り来て楽しきこととなりるたり先ずはかならず吾子の駆けくる

九月四日

広き家われも持ちゐて六ヶ月余り勉強もせず庭のみ見入る

挿し木せる無花果の木の育ちゐて新しき土地に馴染み初めゆく

CCIオイルの紅色の赤流るるを見定めてをり日暮れの店に

3248km走りゐたりき給油終へし日暮れの街にバイク乗り出づ

しゃがみ込み挿し木せる木のそれぞれを見届けて過ごす時間も持ち居つ

蟋蟀が部屋のあちこちに現はることもありがたき幸せのひとつ

冬近し木蓮の葉に蜂潜み動かずなりぬ静かなる庭

十月二十六日

棕櫚繩に支へ直せしが過ちて白木蓮の若芽を落とす

思ひ立ちたることと氣負ひつつ店仕舞ひゐたる市にひば買ふ

十月三十一日

店仕舞ひゐたりき明治百年記念植木市にて檜葉の苗買ふ

昭和四十四年

わが庭

ひむがしを広くとりたるわが庭に妻の野菜育つ元日の陽よ

元日の陽のぬくもりに写真撮ると子等立たしむる庭の東に

根分けせる胡蝶花なども育ちゐて元日の日のぬくもりに居り

きたかぜのみちかへりきてやうやくに本に拋りゆくこころとならむ

物入れに堅きものあり取り出だす洗濯挟みに僅かに笑ふ

子は何を為しつらんとみる子の部屋に座りて本読む子をいとほしむ

九月

暇なく今日も跨線橋わたりゆくわが眼に白き雲ふたつみゆ

木斛の葉の色艶のよろしきを褒むる人ありて九月も半ば

貝殻虫付きたるときに青き実の梅もどきはや赤き実付けし

霜月

石榴の木勢ひあれば忽ちに葉落とし尽くし立ちてありたり

わが庭の裸木となる実ざくろの勢ひをしも朝の電車に

赤き実の僅かなれども梅もどき夜来の雨に露を保てり

大晦日

静かなる大晦日を籠り暮るるまへ庭に散りたる笹の葉を掃く

西風の強ければ笹の葉挿して風避けすチユーリップ未だ芽吹かず
いちはつのみの花壇

遅く植えし山躑躅の根付き寒き日を丈高き枝のつぼみ確かむ

寄せ植えす梅擬き、錦木、山躑躅の類ひ数ふれば十余り二つ

昭和四十五年

十一月 上旬を過ぐ

届きたる身不知柿の箱重し猪苗代町に恙なからむ

桃色の八重大輪の花咲かすと云ふ山茶花は未だ幼きものを

声張りて行くを告げたる子は戻り懐中電燈と傘持ちてゆく
切り株に新枝だひえ付けたる錦木も盆栽によしと丁寧に掘る

よく遊びよく食べし子は風呂に入り寝息も立てず布団に沈む
陽は低く東より射し町角のこの錦木を莊嚴ならしむ

蠍蟬かきせんの生

若杉に逆さ身となりかまきりの子を産み続く太き腹寄せ

太き腹頻りに伸縮す子を産めるかまきりの首筋細し

他念なく太き腹動き子を産まんかまきりの生の激しさを見よ

かまきりは若杉の幹に幼な子を塗り込めて逝けりあはれにてならず

かまきりは何處にゆきて死せるらむヒマラヤ杉に残る分身

ゆくりなくかまきりと蟻の物語思ひ出だせしこともさびしき

霜月も中旬を過ぐ

冬近く豪雨となりて一夜明け小庭川石洗はれてをり

吹き降りの冬の雨止む朝明けにさざんかの白咲けるを告げし



日記帳開けたるところ「四月二十八日花海棠はなやうとう(一、六〇〇円)買ふ」とあり

人形の気持ちとなりて物語りする子のうしろわれ歌集読む

朝霜を踏みてゆく道駅までの二十四、五分と云ふと言へども

色褪せしわが歌に向かふ遅れたる電車待つ駅の階段

枕頭ちんとうの螢光灯のふと暗し今宵は遅く歌書き付くる

縦長く少し大きめの日記帳今年は買はむと思ひて眠る

幾許のわが歌は生れむ冬日和む街に真白き日記帳買ふ

埋め難き隔たりありや炬燵にて長女の音もなく毛糸編みゐつ

漣^{さざなみ}の朝日きらめく冬河の拡^{ひろ}ごりのうへの白き鷗よ

牛屠^{ほぶ}る屠殺場の堀朝日満ち黒き鳥の群れは動かず

冬日和む屋の日差しのゆたけくて古墳の坂を上^{のぼ}りつめゆく

去年咲かぬ大神楽椿つぼみ持ちその大いさを人に告げにき

夜半^{よは}目覚め物置小屋のトタン屋根打つ雨の音聞きゐたりけり

昭和四十六年

古墳の坂 一月～三月

雪融くる観音塚古墳杉木立ここに來りてこころ和み来^{きた}

杉木立中なる丘の坂道を語らひてゆく帽の線白し

雪止みて寒くなりたる土のうへの藪柑子の葉の霜焼くるいろ

土凍り霜焼けしたる藪柑子の葉の下蔭の朱実^{あけみ}のひかり

霜焼くる數柑子の葉の葉裏にて朱けの実ふたつ成れるつま僕しさ

古墳の坂下りて来ればこの斜面初あられ置く白きその粒

古きもの石炭ストーブいまは無く駅の天井の通り穴の空

肉百グラムわが弁当に入れてありさびしきまでに妻は愛しき

通勤の汽車にし悔ゆるわが妻に模様華やぐ靴下もなく

踏切の鐘は鳴りて歩を止むるわれに夥しき灯りの明滅

春浅き烟に朝菜を摘むおうな嫗あか今日もわが見つまうらがなしも

1

朝烟に屈みて春菜摘みてある嫗のたづきわが知らなくに

思ひ出づることく零るる土砂つちざなを切り通しの崖に暫し眺めつ

山鳥の声ひとつ聞きて古墳の坂に見下ろせばわれに水色の街

春日

わが靴に泥濘ねかるむ土も親しけれ古墳の坂をのぼれば春日はるび

夜遅く親しみ書ける葉書なれば朝の舗道に手触りてゆくも

夕凪のごとく静かなる朝と思ふクリームの塗り滑らかにして

朝食の後のゆたけきこころにて作りし歌を妻に聞かせつ

軒々に祭礼の赤き幟立つ朝町をゆく親しみながら

切り詰めし白梅も冬近く植ゑ替へす連翹も花付けたりと妻にわが言ふ

春蘭は白き胞子の花茎を飾してありぬ春さりにけり

わが家の真中にありて平らかに大き石あれば遊ぶ子ら坐る

暇ありて昼を居たればわが妻の立ちて煮豆の皿を運べる

末娘

「アタック」の塗り絵にて塗りながら子は幾度でも言ふ「白いボールに
全身でぶち当たれ」

「百鬼丸」子は膝に見てありぬわれは歌集に斜線を引くも

何時よりか吾が娘肩に頭のせ「大ちゃん」を見てゐる日曜の夕べ

わが娘顎引き締めてテレビ見ぬ「正義の者ら」集ひてあれば

頷きて首諾ひ吾子の見る「鉛の兵隊」の音楽は鳴る

小手毬の花

幼稚園の庭の片辺かたへに咲き初むる小手毬の花見過ごし難し

はや若葉五月も過ぎむ頃ほひを小手毬の木に白き花付け

小手毬の直き低木ひくきの群ら立てる先枝さきえに早く白き花付け

小手毬のごとく低木群生のすがたを夙つとに好めるわれは

小手毬の白き花ばなひとしくも間隔を置きて咲ける正しさ

小手毬の白きはなばな咲き満ちて暮るる夕べとなりにけるかも

小手毬の夕帰り路ゆうかへりじの花みれば暮るるがなに白く浮かべり

新若葉

花のいのち短きものと花摘めば花の下なる新若葉にわわかばはも

花摘めば花の下なる新若葉限にわわかばもおちず生おふこのいのちはや

この丘とうの雜木林さくばやしに息衝いきづきて虫たちはあれ白き泡みゆ

朝な朝なわれに吠えるし犬伏しておとなしくなれりなにゆゑならむ

梅雨晴れて巻雲しろく昇りたり柿の実あおく日のまへに落つ

汗拭ふ厚き手拭ひもの負ひの朝商ひの姥の顔よし

盆を休む朝眼あさめには先ずダアリアのうすむらさきの大輪のはな

折に触れて

雨洗ふ朝の舗道の其處此處にみみず這ひゆく春さりにけり

今日もまた祖母の残せる老眼鏡われは掛けつつ歌集読み初む

三月となりて雪多し軒端には胸膨らみて雀ら声す

柿若葉五月の朝の陽に照れば一切のものわれも諾うべなふ

小手毬の白き花々まろやかに咲きつつ見れば五月は往ゆかむ

珊瑚樹の上向く葉さへ萎びたる猛たけくも暑き日となりにけり

朝戸あさどわが開くればすでに風冷ゆる庭木に潜むとんぼの氣配

昭和四十七年

小吟

四年経て白木蓮の花芽もつその膨らみを妻に告げにき

路傍にて黄蒲公英きいなんぽうの花開く鮮やけきいろ疎おろそかなならず

連翹の黄の褪せつつ花曇る郊外の駅に電車近づく

珍しく今宵古墳の坂にして螢火ひとつ谷側に見し

たにがわ

妻の団し娘裁ちる八畳の居間の机に布地は満てり

台風の去りて明るき午後の居間に娘ら裁断す布の拡張ひろり

いなご取り

美しき花よ手折れと吾子の言ふあざみの藍を忘れるたりき

いなご取るわれの後方に秋草の花を捧ぐる吾子は愛しき



右手多に秋草花あきくさばなを捧げ持つ後方の吾子あこは涙ぐましも

田の畦と土手の叢三度くさむらみわれ来れど拒むものもなかりき

ゆきかへる土手の叢、地の壅み、枯れ藁束かぶしもやすらぎの中

昭和四十八年

杉の大木

観音塚古墳の坂の谷側たにがわの杉の大木も伐られゆきにけり

谷側の杉の大木無くなりて坂に直下に街拡ひろごれり

大木の杉の木立のすべて伐られ坂の谷間に粗朶モダは積れる

葉を落とす雑木々高く見ゆるまで古墳の坂にいまはなき杉

暑き日

暑き日にはかに向かふむらさきのつつじはな落つ坂のうへの道

大根の種を蒔かむと妻言へりやうやく暑き夏過ぎむとす

お月見

お月見の用意手伝ふ末の娘の帰り来るとき喜び告げし

三つ人の子と妻と居てともどもに二階の窓に月を拝む

有難き名月なれや藤袴ふじばかま、薄すすきを高く窓に掲げき

名月は射刺いささるごとくわが家の膳を照らせり拝み申す

名月を拝み申し膳にある団子旨しとともに食ふ

折々のうた

ものなべてひかりを帶びるこの朝の車窓に奇しき白鳩しらとりをみつ

語尾上げて高らかに子は語りけり「魔法のペンダント」ひとびと救ふを

大雪の降りたるあとの凍り雪さくさくとして踏み込みゆけり

強風のために遅れし一番の列車の重き車輪のひびき

病院の煙突の煙り疾風に横に流れつ波打ちにけり

感ひぬるこころ癒えゆくさくさくと雪凍る道歩みてあれば

屋外の駅のホームの薔薇のはな大寒を過ぎ骸の如し

冬に向ふ庭に筒咲く佗助の花は白しもさびしと云はむ

クリスマスの櫻

蟻の寄るざくろの実ふたつ口割らず冬に入り初むその青き肌

花付けずさるすべり終る年の瀬を寒土痛み囲ふ檜葉の葉

赤咲きのさるすべりと云ふも花付けず終らむ年を根に置く檜葉の葉

終りぬるクリスマスの櫻_{もみ}に朱極まれる鬼_{ほおづき}灯_{れん}の連

ほおづきの一連の朱濃くなれる寒土に囲ふクリスマスの櫻

ほおづきの外皮の朱の寒の土に濃くなれるところ櫻の鉢_{かん}囲ふ

昭和四十九年

伊豆沼の白鳥 一月五日

鈍行の列車に乗りて妻と子と遙々と来し白鳥見むと

降り立てばほろほろと鳴く声の沼の四方より興りてありぬ

白鳥の鳴く声聞こゆ飛ぶも見ゆ吾子駆け出づる姿うれしむ

差し初むる薄日の中に白鳥の白さ蘇る驚くほどに

雲間より薄日差し初めこの沼に集ふ千羽の白鳥光る

折りに触れて

薄日差す沼に千羽の白鳥の集ひて浮かぶ密かなる大いさ

四十九しじゅうくのわが始めての古車ふるくるまホンダ三六〇白く小さく

牛乳瓶に色紙を貼りて子の作る雛人形の髪改むる

丘の家の黄なる土の盛り上がり厚葉青かりチユーリップの列

休日を遠く帰り来る子ろがため冷やし豆腐の葱とりにゆく

鳥の海、海水浴 七月二十八日

90

今日の日の海水浴を待ち待ちて日過ごし吾子の明け方の眠り
寝足らひて何の夢をも見ざりしと聞けば湧きくるこの安らぎは
戸開くれば朝霧込む今日の日の海水浴を楽しむわれは

磯の香の漂ひくれば海近し海の匂ひのすると言ふ子よ
陽のひかり直に差さねど梅雨明けの海の恋しき人等集へる

小さなる身体を濡らし限りなく寄せくる波に飛び跳ねにけり

限りなく寄せくる波の高波に飛び跳ね濡るる子を目守りたり
波高き荒磯にてあれば引き潮の速きを叫ぶ拡声器の声

昭和五十三年

長男、海上自衛隊入隊 四月三日

入隊のひと月後となりたるに子を呼びて走れり古墳の坂を

雷神山古墳の丘に運動の背中合はせもしたりけるかな

海見ゆる雷神山古墳の頂きに子と唱へたる般若心経

穏やかなる四月初めの朝日差す道を歩めり子と二人して

明日遠く去り行く子とし歩みみて仏界段位のことなど話す

靈の世界とつとつとして語りたる子の散歩路の朝忘ら得ず

子雀 七月十七日

この丘の舗道を横切り子雀の低く飛びてはまたひとつ飛ぶ

この丘に子すすめ飛べばちちのみのちちなるわれの子の名を呼べり

横須賀の海の訓練を終りぬる子らはも新しき任地へ向かふ

横須賀の海を別れて下総の広野なる基地へ赴くならむ

雷神山古墳の坂に蟬しぐれ聞くなるときに三月を経んか

子の行きて三月を経たる草も木も茂りて古墳われを包めり

昭和五十五年

丘の桜 四月十八日

四月には稀なる雪の降りたれば丘の桜の如何にと急ぐ

雪の後の桜見上げつ何事の障りもあらず咲き初むるはや

咲き初むるあれど大方つぼみにて朝日子がなかのさくらいろ映ゆ

ブリキの如雨露 四月二十二日

十年余り使ひて注ぎ口見えずなりしブリキの如雨露を買ひ替へむとす

新しき如雨露欲りるつ購へば僅かに空しひと日の終はり

十年余り使ひて注ぎ口見えずなりしブリキの如雨露の恋しきろかも

丘下の鯉のぼり 四月二十四日

この丘の西の外れの坂下に以前より並ぶ小住宅群は

坂の上に見下ろせば低き屋根のうへ鯉のぼりの竿三つ四つ立てり

低き屋根を突き出でて立つ鯉のぼりの高き竿先矢車光る

マツチ箱を並べたるごとき住宅群にいまと立つ鯉のぼりの高き竿

朝明けの坂に思へる丘下の子らが眠りに夢ありなむを

空晴れて鯉のぼり流る夢も見むこの小住宅群の幼な子達は

花冷ゆる道

花冷ゆる道帰るさのたまゆらを久しくもなき静けさに遇ふ

吠ゆることなき犬の眼のやさしくて遠く見つむることもさびしき

吾子帰る日のわが歩み速ければ花冷ゆる坂に歩を落しめつ

ひと日ひと日生きのいのちの休むなき若蝦手に小さき花付け

小さなる花の臙脂えんじの筒咲きて幾垂いくたるかも吾門楓

南無大悲觀世音菩薩あこ吾子あが赴ゆく下総基地に冥加あらせ給へ

花海棠零こぼるばかり垂り花の垂りたる夕べ国旗を降ろす

若かへるで

この夕べ楓若葉の伸びきりて広ら新葉ひろにひばとなりにけるかも

ひと息に若かへるでの広ら葉の整ふまでの夕べとなりぬ

かへるでの新葉にひばが許もとに残りたる褪せあにし花の蕊しべあらはなり

かへるでの花蕊の長くなりにつつ若葉が許に残るあはれさ

丘の老夫婦

杖つきてこの丘の道朝歩ありく老夫婦あり妻が助けつ

覚束おほつかな足を助けて妻添へりへ歩きゆくすがた羨しきろかも

立ち止まり杖指さして主あるじその家の樹のことなども妻に言ふらし

生きのいのち尊きものか老夫婦ありじが助け合ひ歩く朝の姿は

アカシア並木

わがこころひそかに寄りてゆくところ黄きに色づくアカシア並木

ひところの濃き青葉なく疎そとなれる黄半ばするアカシア並木

遠き日のわが大連のアカシアの並木花房思はるるかな

こころ涸れ幾日いくひか久し街にゆき棟方志功板業集に遡あふ

值高き三万五千円をわが払ふ棟方志功集小脇こわきに抱かかふ

蔵王ゆき、 永沼三郎君らと同行

釜房の大おおき湖みずうみ夜なれば静寂しじやの底の村も思はむ

霧流る藏王の山の頂きに共に来りて火口湖覗く

融け残る冰はありて火口湖の碧く鎮まる水のいろはや

昭和五十六年

病室にて 緑内障手術、わく沢眼科入院一月七日

手帖には初句の五音を書き写す万葉のうた四十と三余り

右眼うがんにて初句の五音を確かめつ口遊くちぎりみをり万葉の歌

辛うじて残る右眼うがんを勞いたはりつ歌確かめて写しゐたりき

痛みある左眼いたはりときをりに手帖を翳かざし歌読みゐたり

ひむがしの一枚ガラスの大窓おほまどの広きに立ちて外の面見盡もみくす

静かなるひとりとなりてあるときにあまりに貧しラジオを消しぬ

現身うつせみのわれを支ささふる歌ありてひとり病室に声に出いだすも

誰を頼ると云ふにもあらず手術あと獨居ひとりゐの病室へやに起き臥すわれは

眼病前後 五十五年十二月分補遺

仕切り屏高き歩道の日溜ひだまりをゆく身はぬくし靴鳴り出いづる

シクラメンの鉢の青苔洗ひをりわが眼を病みて十日を経つる

シクラメンの花茎折ればたはやすし水含む茎高き音する